

博士学位論文内容の要旨

学位申請者氏名

李 現

論文題目

菅原道真の漢詩文における『莊子』の受容

論文審査担当者

主 査 中前 正志

審査委員 大谷 俊太

審査委員 坂本 信道

審査委員 滝川 幸司

本論文は、菅原道真の漢詩文に見られる『莊子』受容のあり方を検討するもので、道真が、『莊子』の注釈の中でも、郭象の注と成玄英の疏に基づいて詩文を作成したことに関して、中心的に論じている。また、道真の思想などにも言及する。さらには、『徒然草』の『莊子』受容についての論も付載している。

本論文は、序論、本論第一章・第二章・第三章・第四章・附論、結語から構成される。

序論では、唐代における『莊子』の地位や道真の莊子受容を概観して、本論の目的を述べる。第一節「唐代の朝廷と『莊子』」では、『隋書』経籍志、道宣『集古今仏道論衡』、『全唐文』などに収載される『莊子』に関する勅命を取り上げ、「莊子」という人物がどのように神格化されているかを述べる。また、「策道德経及文列莊子問」(『全唐文』巻四十)「道学策問五道」(『全唐文』巻四十八)など『莊子』をテーマとする科举策問を取り上げ、その内容を分析し、唐王朝における『莊子』の位置づけを明らかにしている。第二節「菅原道真と『莊子』」では、平安時代における『莊子』受容の全体像をまとめ、道真の讃岐守時代の作品を中心に、研究史を踏まえつつ、その漢詩文に見える『莊子』の利用について概観する。そして、第三節「本論文の目的」において、本論文の目的を提示し、構成について説明している。

本論第一章「菅原道真の『秋湖賦』と『莊子』 詩語「涯岸」をめぐって」では、菅原道真「秋湖賦」を取り上げる。「秋湖賦」中に、「涯岸」の語が見えるが、道真の詩文では、他に二例しかなく、しかも唐までの詩文には例が少ない。この「涯岸」の語に道真がどのような意味を込めているのかを検討している。まず、制作時期について、『莊子』を踏まえた三首の連作(本論第二章～第四章にて検討される)が作られた寛平二年(890)あたりを想定する。そのうえで、「秋湖賦」の題韻「秋水無岸」に注目し、それが『莊子』に基づくことを確認する。さらに、賦全体の構成を、(一)「秋」、(二)「水」、(三)「無岸」と三つに分けて読み解き、題韻「秋水無岸」と「秋湖賦」の内部構造を分析して、「秋湖賦」の展開には二つの筋があることを指摘する。そして、「涯岸」の語が皇恩に関わって使用されていることを明らかにしつつ、道真が、『莊子』の内容を素材として、それを君臣の情という儒家的な文脈に取り込んでおり、『莊子』の断章取義的な受容を行

ったと述べている。

第二章「菅原道真の斉物観の形成 「北溟章」に見える白居易詩の影響」では、道真が讃岐守の任期を終えて帰京した時に作られた三首連作の中から、「北溟章」を取り上げる。この連作はいずれも『莊子』逍遙遊篇の寓言に取材しているが、「北溟章」で描出される道真の斉物観が、『莊子』の郭象注、成玄英疏の影響を受けるとともに、白居易の「斉物」を詠じる詩に倣うことをも指摘して、『莊子』注疏から白居易を経て菅原道真に至る経路を明かしている。「北溟章」の内容を解釈したうえで、道真の『莊子』利用、特に郭象注と成玄英疏を重視している点について確認し、同様に斉物観を用いて逍遙遊篇の寓言を解釈するという詩のパターンが白居易に見られることを指摘する。そして、道真は直接的には白居易に学び、「北溟章」を制作していると結論づけているのである。

第三章「菅原道真の「小知章」と『莊子』 詩語「有待」と「無待」をめぐって」は、前章に続き、三首連作の中から「小知章」を取り上げる。この「小知章」は、『莊子』成玄英疏に見える、何かを頼みとすることを示す「有待」と、何にも頼らないことを示す「無待」(「無為」)をめぐって、議論を展開しているが、道真は郭象注と成玄英疏だけではなく、『真誥』や支遁の「逍遙論」の影響も受けていると論じている。まず、「小知章」全体を解釈し、「有待」を否定して、「無待」を肯定していることを指摘し、また「有待」「無待」が詩語として使われていることを確認する。「有待」「無待」という哲学概念が詩語として使われる事例は、梁の陶弘景『真誥』運題象篇所収の真人応酬詩に見え、「小知章」の「有待」「無待」は、『真誥』の五言応酬詩の影響を受けていると述べる。さらに、「小知章」の題脚の「無待之心適焉」が、支遁「逍遙論」の「夫逍遙者、明至人之心也」を意識していることも指摘する。以上のように、「小知章」が、『莊子』郭象注と成玄英疏だけではなく、『真誥』や支遁「逍遙論」の影響を受けていることについて論じている。

第四章「菅原道真の「堯讓章」と『莊子』 道真の聖賢観について」は、これも前章に続いて、三首連作の「堯讓章」を取り上げ、詩語「優遊」に焦点を当て、道真の『莊子』受容の様相を考察しつつ、儒家思想を超えた隠者を志向する道真像を提示する。「堯讓章」全体を分析して、「優遊」の解釈を行ったうえで、道真が自分を許由と見なし、宇多天皇を堯に準えていることを指摘する。そして、このような聖賢観が、『莊子』の郭象注、成玄英疏、白居易「汎涓賦」の影響を受けていると論じている。

附論『徒然草』第七段と白居易の人間観 『莊子』との関わり」は、兼好が『徒然草』第七段で、『莊子』逍遙遊篇と天地篇の内容を並べて引用している意図を分析して、その人間観が逍遙遊篇の堯の精神のあり方と関わっていることを論じる。また、「四十に足らぬほど」という年齢の節目について、白居易の年齢意識と関わることを指摘し、その点も『莊子』に基づいて考えられることをも明かしている。そして、兼好と白居易の人間観に説き及ぶ。具体的には次の通り。兼好は、『徒然草』第七段で『莊子』逍遙遊篇、斉物論篇、天地篇の内容を使い、無駄な長い人生を夢として把握しながら、和語「のどけし」をもって堯の精神「其神凝」を表わしており、命の長さはともあれ、「もののあはれ」を知っている心を失わないように静閑に人生を送るべきであると述べているが、それは『莊子』の理解から生まれた人間観であると考えられる。また、白居易は、四十歳という年齢の節目を意識して、三十九歳の作品「隠几」で、『莊子』に見える聖人の精神のあり方である「其神凝」「死灰」「槁木」を四十歳の理想としている。しかし、人間として老衰を

恐れる自然な感情があつて、四十歳以降の詩を見ると、「死灰」「槁木」の使い方はだんだんに感傷の方向へ移行しており、詩人として、「感興」を重視する白居易は、体の老衰に伴い、感興が失われることを悲しんでいる。『徒然草』第七段では、四十歳を超えた人生について、否定的なものに見ているが、その中の「夕べの陽に子孫を愛して」は、明確に白居易の「不致仕」を踏まえており、第七段全体の構造と思想に関係しているものと考えられる。兼好と白居易の人間観は、『莊子』と関わっていて、兼好も白居易も、文学者の感情を持って、長寿よりも、人間の感受性を重視しているのである。

結語では、各章の概要と論文全体の主旨、およびそれらを踏まえた将来の展望を述べる。将来の展望としては、江戸中期の佚齋橋山『田舎莊子』の齊物思想を中心に検討して、道真から橋山へと至る『莊子』受容の系譜を辿りたいとする。